

大坂城跡の調査

2003年12月13日



(財) 大阪府文化財センター

大阪府警察本部棟新築工事に伴う
大坂城跡発掘調査現地説明会資料





調査の経過

今回の調査は大阪府警察本部棟の新築2期工事に伴うものです。1期工事に伴う2000年の調査では、北側の谷から「戊申年」と書かれた日本最古の紀年銘木簡が出土するなどして注目を浴びました。

今回の調査でも谷の続きを掘る予定ですが、今回は新たに確認した豊臣大坂城の堀を中心に一般公開を行うことにしました。



秀吉の大坂城

本能寺の変で織田信長が倒れた後、羽柴秀吉は天下統一の拠点として大坂城築城に着手します。2年足らずで完成した本丸の天守閣には軒瓦に金箔が貼られた壮麗なものでした。その後、二の丸や人工の堀と河川によって城下町を囲む惣構が築かれます。さらに秀吉は晩年に三の丸築造を命じ、これにより大名屋敷を伏見から移転し、すでにあった町屋を新たに惣構の外に整備した船場に移しました。工事は秀吉の死後も続けられ、やがて屈指の大城郭が完成します。三の丸は大坂冬の陣の後完全に壊されたため、位置や規模は不明であり、『徳川武鑑』の「大坂冬の陣配陣図」や断片的な発掘調査成果から類推せざるをえない状況が続いていました。



▲ 調査地と大阪城



▲ 調査地全体略図

(図中の番号は写真の番号と対応)



⑥ もう一つの堀

2a トレンチでは深さ2mの堀を確認。底面は土坑によって凸凹にされています。隅櫓の東側を区画するものなのでしょうか。

(堀45:南から)

① 掘り出された堀

大阪歴史博物館から見下ろすと、堀の全容を手にとるように見ることができます。過去の調査成果とあわせると、この堀は外堀にあった大手口を逆コの字形に囲んでいたものと考えられます。

(堀83:南から)



② 堀の底は凸凹

堀の大きさは幅約25m、深さ約6mです。石垣はありませんが、堀の斜面は40度以上で簡単には登れません。また、堀の底は意図的に凸凹に掘られ(堀障子)、攻められにくくなっています。

(堀83:南から)



③ 埋め戻された堀

堀の土層断面を観察すると、堀は底面に堆積したヘドロを除けば、一気に埋め戻されていることがわかります。出土遺物の年代などから、大坂冬の陣の直後に埋められたものだと考えられます。

(堀83:東から)



④ 堀に落とされた石

2b トレンチでは、堀の埋め戻しに伴って落とし込まれた石がかたまっで出土しました。これらの石は堀の内側にあった櫓や堀の石垣などが壊されて落とされたものと考えられます。

(集石遺構91:北から)



⑤ 切り落とされた首

堀に落とされた石の間から人骨が出土しています。後頭部には刀傷があり、首の骨も切断されていました。堀からは多くの人骨が出土しており、戦国の世を彷彿とさせるものといえます。

(人骨99:西から)





⑦工事中の事故死？

堀の埋め戻し過程で埋葬された人骨が見つかりました。年齢・性別は不明ですが、竹で作られた四角い籠（行李）の中に納められていました。堀の埋め戻し工事中に死んだ人だと考えられます。

（墓107:西から）



⑧三途の川の渡し賃？

頭蓋骨の近くに五文の銭が添えてありました。このような銭貨は「六道銭」と呼ばれるもので、六地藏との関連が指摘されるほか、三途の川の渡し賃であるとも伝えられています。

（墓107:南西から）



⑨漆器を抱いた女性

堀の埋め戻しの途中で埋葬された女性。ムシロに巻かれて埋められていました。急ピッチで進められた堀の埋め戻し工事には、老齢の女性でさえも動員されていたことを示すものといえます。

（墓112:北から）



⑩漆器碗・数珠・銭

上記の人骨はお腹に六文の銭をのせた漆器碗を抱き、手には数珠が巻かれていました。埋葬方法は非常に簡素ですが、あわただしい工事中にあっても丁寧に埋葬されていた状況がうかがえます。

（墓112:北から）



⑪桶を転用した井戸

調査地の西端から井戸が見つかっています。井戸枠には桶が転用されていました。中からは唐津焼の碗や銭貨などが出土しており、堀の年代に近い時期のものと考えられます。

（井戸88:西から）

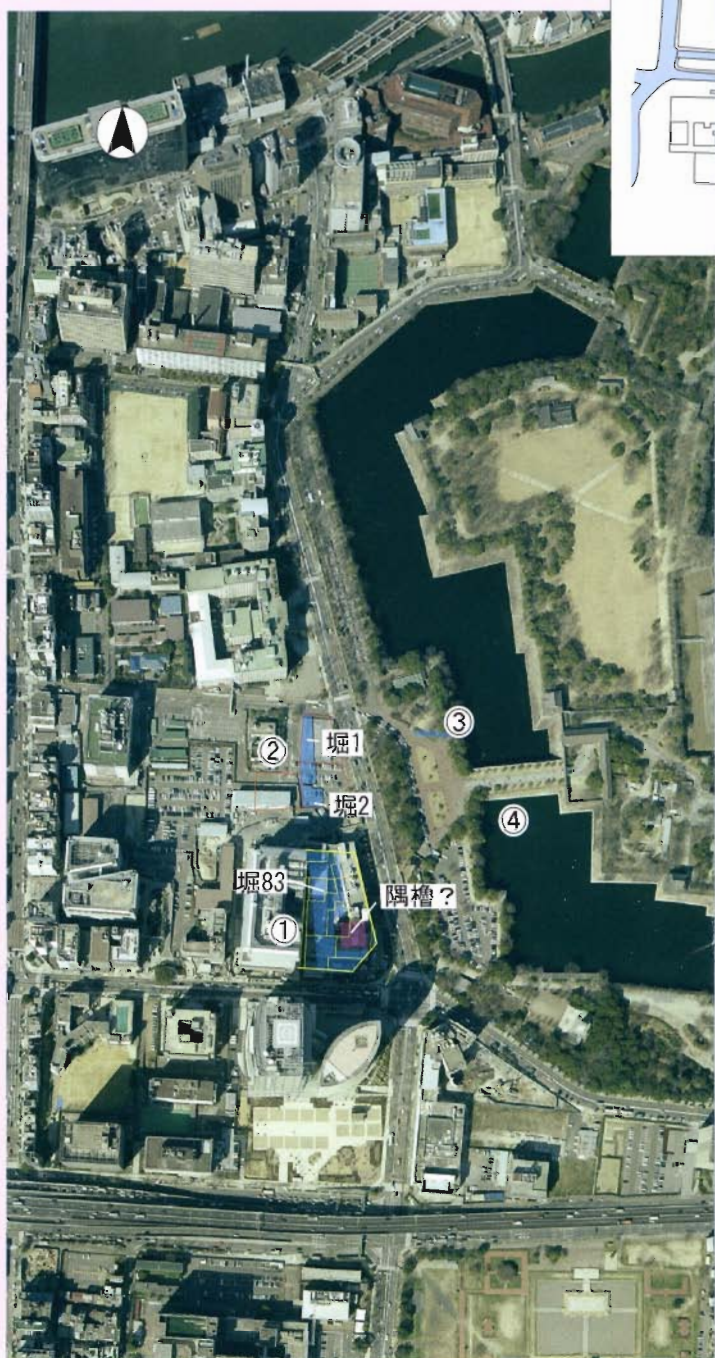
調査の成果



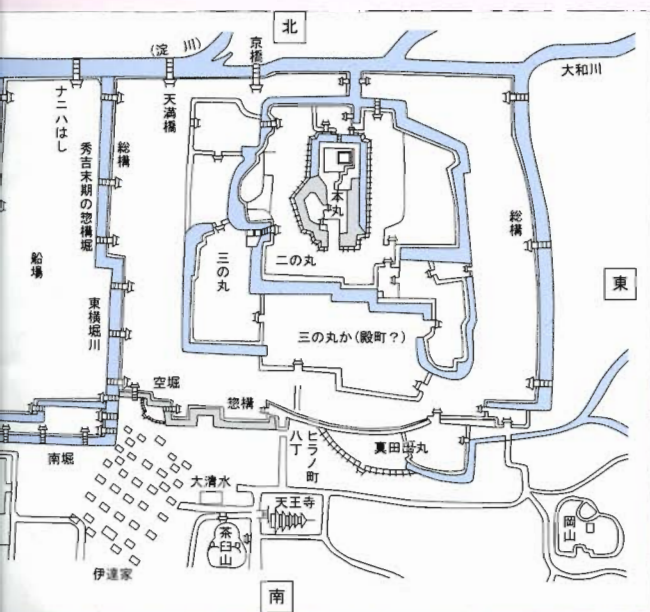
今回の調査で新たに確認された堀は調査地で東に折れて大阪城の外堀の方向に向かっています。

年度に行った北側の調査では南北方向の堀の底面は「堀障子」になっていたことが判明しています（下とよく似ており、両者は一連の堀である可能性が高いもの）。側において(財)大阪市文化財協会が行った調査（OS-16次調査）上層は豊臣大坂城期の堀になる可能性が考えられています。この堀であれば、西側で②の堀と繋がる可能性もあります。コの字状に囲む可能性が高いといえます。このような区画けられる「馬出曲輪」が一つの郭として発展したものと考えられます。

今回の調査で最も重要な成果の一つは「倭台武鑑」をはじめとする大坂城の絵図において大手口の西側に描かれた堀の形と今回の調査で確認した堀の形が非常に似ている点であるといえます。これまでの研究ではこの区画（三の丸）を大きく捉えていましたが、今回の調査によって、再考の必要性が浮上することとなりました。



の北端から南に向かってのびており、調査地南端付近
います（下写真①）。周辺の調査のうち、平成2・3
見つかっています。この堀も素掘り^{すほり}で石垣を持たず、
写真②）。このような状況は今回の調査で検出した堀
と考えられます。また、大手前土橋^{おおてまえどばし}（下写真④）の西
（調査）では北側に向かって低くなる地形を確認し、その
（下写真③）。部分的な調査ですが、これが東西方向
このように見ると、これらの堀は大坂城の大手口を逆
は城の防御機能を備えた出入口である虎口^{こうぐち}の外側に設



▲ 大阪城大手口周辺で検出された堀

⑫首を切られた馬

首の部分で切り落とされた馬の頭部。荷物を運んだりしていたものが、最終的には食べられてしまったのでしょうか。堀の南西隅を中心に20ヶ所以上で牛馬などの獣骨が出土しています。

（馬骨101:北から）



⑬捨てられた牛と馬

牛と馬がまとめて捨てられていました。堀の埋め戻しに際してはたくさんの牛馬が働いていたのでしょう。出土した骨には牛馬のほかには犬や猫、珍しいものではイルカの骨も含まれています。

（獣骨集積126:北東から）



⑭傘

堀の埋め土から出土しました。残念ながら先端部分は江戸時代の井戸で壊されていますが、竹で作られた骨まで残るきわめて珍しいものです。柄の部分には漆が塗られています。

（傘112:南から）



⑮捨てられた生活用品

堀の埋め土の中から瓦や陶磁器のほか、木製品などが多量に出土しています。とくに堀の南西隅からは色々な遺物がまとめて捨てられていました。右に掲げた御札もここから出土しました。

（遺物集積127:東から）



⑯並べられた板

2cトレンチの東端で大きな板材が並べられた状態で出土しました。板材は近くの建物に使われていたものを転用したと考えられ、堀の埋め戻しの際の工事用道路であると考えられます。

（道路状遺構113:南から）





⑰積み上げられた土嚢

堀の中からは工事に造られた道路が姿を現しました。板材の下層には土を詰めた俵（土嚢）がそのままの形で残っており、基礎として積み上げられていたことが判明しました。

（道路状遺構106:西から）



⑱鉄砲玉が残る板材

道路状遺構に転用された厚さ約3cmの板材に鉄砲玉が残っていました。これまでも鉄砲玉は出土していますが、板材に打ち込まれた状態での出土は全国でも初めての事例であるといえます。

（道路状遺構106）



⑲工事用の道路1

堀の南側から北に向かって板塀等の板材を転用して並べた遺構が見つかりました。この板材の下部には土嚢が積み上げられており、その下には瓦片などが敷かれていました。ぬかるんだ堀を効率的に埋め戻すために造られた道路であると考えられ、あわただしく行われた堀の埋め戻し工事を垣間見ることができます。

（道路状遺構106:南から）



⑳工事用の道路2

道路状遺構106のすぐ東側の下層からも南北方向に板材を並べた遺構が見つかりました。板材は北に向かって緩やかに傾斜していますが、これも意図的に並べられたものであることは確実で、工事用の道路であると考えられます。板材は上水道などに用いられていた木樋が解体されて転用されたものです。

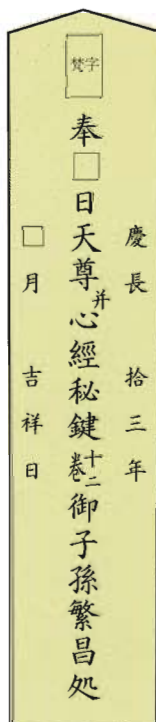
（道路状遺構114:北から）



主な出土遺物

今回の調査で検出した堀の中からは多種多様な遺物が出土しています。

豊臣期の大坂城には金箔瓦が多く使われていたことが知られています。今回の調査でも残りのよい金箔瓦がたくさん出土しています。また、秀吉の家紋である桐の文様をもつ滴水瓦（朝鮮半島の瓦を模して作られた軒平瓦）も出土しました。そのほか、堀の南西隅からは「子孫繁栄」を祈った際の御札が出土しています。この御札には慶長13(1608)年の年号が書かれており、堀が埋められた年代を推定する上でも重要な意味をもっています。



▲ 堀から出土した御札



▲ 堀から出土した金箔瓦



▲ 堀から出土した陶磁器

大坂城関連年表

- 天正八（一五八〇）年
石山本願寺焼亡
- 天正一〇（一五八二）年
本能寺の変、山崎の合戦
- 天正一一（一五八三）年
賤ヶ岳の合戦、秀吉、摂津を占有
- 大坂城本丸築城開始
- 天正一二（一五八四）年
小牧・長久手の戦い、本丸完成
- 天正一三（一五八五）年
秀吉、関白になる
- 天正一四（一五八六）年
二の丸築造開始、秀吉、太政大臣となり豊臣姓を賜る
- 天正一六（一五八八）年
二の丸完成、刀狩令
- 天正一八（一五九〇）年
小田原攻め、秀吉天下統一
- 天正一九（一五九一）年
千利休、自害、関白を秀吉に譲る
- 文禄元（一五九二）年
文禄の役
- 文禄三（一五九四）年
懸構築造開始
- 文禄四（一五九五）年
秀吉から関白職を剥奪、秀吉自害
- 慶長元（一五九六）年
慶長の大地震
- 慶長二（一五九七）年
慶長の役
- 慶長三（一五九八）年
三の丸築造開始、秀吉死す
- 慶長五（一六〇〇）年
関ヶ原の合戦
- 慶長八（一六〇三）年
家康、征夷大將軍となり、江戸幕府開く



大坂冬の陣図屏風（左隻）東京国立博物館蔵

慶長一〇（一六〇五）年

秀忠、征夷大將軍となる

慶長一九（一六一四）年

七月 方広寺鐘銘事件

一〇月 家康、大坂征討を命令

十一月 大坂冬の陣始まる（一五日）

本津川口の戦い（一九日）

今福・鳴野の戦い（二六日）

博労淵・野田・福島

の戦い（二九日）

一二月 真田丸の戦い（四日）

和議成立（二〇日）

外堀埋め戻し開始（二三日）

慶長二〇（一六一五）年

一月 外堀の埋め戻し完了（一九日）

四月 家康、大坂再征を命ず

五月 大坂夏の陣 大坂城陥落

秀頼・淀殿自害し、豊臣氏滅亡

元和五（一六一九）年

徳川幕府、大坂を直轄地とする

元和六（一六二〇）年

大坂城再建工事が始る

寛永六（一六二九）年

大坂城再建工事が終了



大坂冬の陣図屏風（右隻） 東京国立博物館蔵

大坂冬の陣図屏風（東京国立博物館蔵）

「大坂冬の陣図屏風」は慶長19（1614）年の大坂冬の陣の様子を描いたものです。江戸時代後期に描かれた模写と考えられていますが、その描写は細部にわたって精緻であり、原本は冬の陣直後に製作されたものであると考えられています。

したがって、この屏風は大坂冬の陣の状況を知る上できわめて重要な史料であるといえます。全体の構図は、大坂城をやや北寄りの西側から描いています。また、同日同時刻の戦況を描いたものではなく、左隻の第四・五扇では11月26日の今福・鳴野の戦い、右隻の第五・六扇では12月4日の真田出丸の戦いなど、大坂冬の陣の主要場面が描かれています。

（この解説は岡本良一氏ならびに中村博司氏の諸研究を参考にしています。）

大坂城跡の調査 大阪府警察本部棟新築工事に伴う大坂城跡発掘調査現地説明会資料

発行人/跡大阪府文化財センター

〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号

TEL 072-299-8791

印刷/陣中島弘文堂印刷所

2003年12月13日

